

## 村の伊勢講

江戸時代、庶民が領国の外に出ることは厳しく制限されていました。しかし例外として信仰のための寺社参詣や医療を目的とした湯治などは制限されることはなく、なかでも特に活発に行われていたのが伊勢神宮への参詣です。

伊勢参宮は今日のように日帰りだというわけにもいかず、往復に日数がかかりました。その費用はいかに生活のレベルが向上したといっても、庶民にとってはやはり重い負担となりました。

そこで伊勢参宮を目的とした講（伊勢講）が全国的に結成されるようになります。長岡京市内でもほとんどの村で伊勢講が結成され、その構成は組ごとであったり、一定の家が世襲的に加入していたりと様々です。講に加入すると当屋を持ち回り、年に数度会食をして、当屋もしくは講員たちの中からくじで選んだ者を参拝者と決めました。積み立てた講金や講所有の土地から上がってくる小作料などを代参者の路銀にあてるかわりに、代参者は講を代表して必ず神宮を参拝し、帰村したおりに大麻（=神札）を講員に配布しました。

今回は、教育委員会に寄託されている下海印寺地区の伊勢講関係古文書を展示し、江戸時代の寺社参詣の様子を紹介します。



## 伊勢参宮の歴史

律令<sup>りつりょう</sup>時代、伊勢神宮は天皇が祭祀を行う皇室の氏神として、皇后・皇太子といえども天皇の許しがなければ奉幣も参宮もできませんでした。貴族や庶民にいたっては一切奉幣を禁止するという、いわゆる「私幣禁断<sup>しへいきんだん</sup>」の社でした。律令制が崩壊した平安時代末期以降、私幣禁断も緩和され、時代が下るにつれ伊勢信仰は武士や庶民層にまで広く浸透し、各地からの参拝者も次第に増加していきました。

江戸時代半ばごろになると、庶民の生活レベルの向上、交通路や宿泊施設の整備、神宮の下級祠官（＝御師）たちによる布教活動、更に道中記や絵地図、東海道五十三次の浮世絵など庶民の旅情を誘うものが次々に刊行されたことなどから、伊勢参宮はだれもが「一生に一度は」と願望されるほど盛んになっていきます。

展示資料（12月4日～12月27日）

下海印寺大伊勢講文書

- ・正徳3年写の「寛文十一年 御伊勢四講中式法」
- ・享和3年の「道中諸払帳」
- ・天保15年「講参諸雑用覚帳」
- ・安政4年「御年貢米請取帳」
- ・明治10年「入費簿」
- ・「寛永通宝」

## 江戸時代のツアコン

### 「伊勢の御師」

「御伊勢四講中式法」にでてくる「太夫殿<sup>たゆう</sup>」とは、実は伊勢神宮の下級神官である御師<sup>おんし</sup>のことを指します。伊勢神宮は明治になるまで個人で直接神前に奉幣することは禁止されていました。そこで御師が参詣者に代わって祝詞<sup>のりと</sup>の奏上や寄進物の奉納などを行い、大麻を授かりました。御師は年に1度、それぞれの担当地域や得意先(檀那)などを回って伊勢暦や大麻などの土産物を配布して伊勢参詣の勧誘を行ったり、参詣者がくると、その出迎えや接待、神宮やその周辺の道案内から宿泊先の手配まで、現代のツアーコンダクターさながらのサービスを行っていました。

伊勢の御師は多い時で600人ほどいましたが、明治に入ると、御師制度の廃止、また庶民の生活の著しい向上でお金を積みたてなくても自由に旅行できる者が増えてきたこと、庶民の旅に対する意識の変化もあって、御師の数は講の衰退と共に次第に減少していきます。



展示資料（1月8日～2月3日）

#### 大豆講文書

- ・大豆講文書の文箱
- ・寛政元年「道中諸入用扣帳」
- ・明治8年「有金出入帳」
- ・明治11年「太神宮代参願番帳」
- ・大豆講証文入（封筒）
- ・明治44年「大麻下付願」

## 『市史』から お知らせ

「民俗編」...地区ごとに行われた聞き取り調査の結果を中心に、伊勢講をはじめ、先人から伝承されてきた民俗行事を図や写真つきで紹介しています。

「本文編二」...今回紹介した下海印寺地区のほか友岡や井ノ内など他の地区の伊勢講について、市内に伝わる古文書からわかったことを紹介しています。

これらの本は郷土史コーナーにあります。また、図書館2階事務室で、購入することもできます。

## 展示予定

### 第3回 長岡天満宮の万灯祭（平成14年2月5日～平成14年3月31日）

みなさんのご要望にこたえながら、親しみやすい展示コーナーにしていきたいとおもいます。  
ご意見などありましたらお寄せください。